

平安時代の鉄製護摩炉

護摩炉とは、お寺などにある護摩壇の中央に設けた護摩木を焚く火炉のことで、広丘村が塩尻市となる前の昭和29年（1954）、広丘村吉田（現広丘吉田）長者原南の長谷寺跡と推測される場所から、平安時代の作とされる鉄製の護摩炉が発見されました。（写真）

铸铁製出土品のため腐食が甚だしく、一部欠損していますが、護摩炉の外形は49.5cmあり、平安時代にこれだけの鉄（15.46kg）を使っていることが大変珍しく、この護摩炉に見合った規模のお寺の存在が推測されております。



護摩炉に関わる伝承

伝承によれば、長者屋敷（現広丘吉田の長者原公園）の南側に、場所は特定されておりませんが“長谷寺”という寺院が存在していたようです。

昭和39年（1964）の新聞には「鎌倉時代初期に権力を持った豪族が中信平にいて、この仏具を用いるような大きな寺があり、かなりの仏教文化が広まっていた」と報道されています。

長者屋敷は、中世の館跡として有名ですが、周辺からは縄文時代の石鏃（石を原料とした鏃（やじり）のこと）や打製石斧、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器などが採集されていることや、護摩炉の出土地付近で、大量の古銭も出土していることから、平安時代の長者原公園のあたりには大きな寺院があり、それに見合った交通路や街並みが整備されていたのかもしれません。



郷福寺（広丘郷原）の護摩壇と護摩炉